K131.1
1
2a

K131.1
1
2a

文部省著作

尋常小學修身書

第二學年
教師用

發行所　教育圖書合資會社

K131.1
1
2a

文部省著作

尋常小學修身書

第二學年
教師用

明治
37 1 8
内交

發行所　教育圖書合資會社

目錄

第一　親子……一頁
第二　おかあさん……三
第三　おとうさん……五
第四　自分のこと……八
第五　教師……十
第六　としより……十三
第七　きゅーだい……十五
第八　たべもの……十八
第九　清潔……二十
第十　正直……二十三
第十一　きまりよくせよ……二十六
第十二　ことばづかひ……二十八
第十三　約束……三十一
第十四　人のあやまち……三十三

第十五　わるいすすめ……三十五
第十六　友だち……三十八
第十七　物を粗末にあつかふな……四十
第十八　あやまち……四十二
第十九　拾ひ物……四十四
第二十　生き物……四十七
第二十一　日の丸の旗……五十
第二十二　規則……五十三
第二十三　天皇陛下……五十五
第二十四　勇氣……五十七
第二十五　勇氣（つづき）……五十九
第二十六　人に迷惑をかけるな……六十二
第二十七　よい子供……六十四

尋常小學修身書　第二學年教師用

第一　親子

（二時間）

目的

親子の情を知らしむるを以て、本課の目的とす。

說話要領

ある所にお竹といふ少女あり。おとなしき兒にて、よく父母につかへ、父母もはなはだこれを愛せり。あるとき、父は商用のため遠き所に旅立せんとす。お竹はこれを聞きてその別を惜み、父もまたお竹のことを心配し、「われの歸るまでには月日多くかかるべし。留守の中は身體を大事にし、よく母上のいひつけを守り、幼き弟を愛すべし」と諭しおきたり。さていよいよ出立

の日となれば、母は夜の明けぬ中より起きいでて、父のために
いろいろの用事をなし、お竹もいつもより早く起きて、母の手
助をなせり。やがて父は旅の用意を整へ、家をいでゆけば、母は
幼き兒を抱き、お竹をつれて、近所まで見送りたり。この繪はお
竹が母と共に父を見送る所の繪なり。見よ、父にすがりたるは
お竹にて、母の抱きたるはお竹の弟なり。父はお竹に向ひ、「おと
なしくしてわが歸を待つべし」といへば、お竹も「一日も早く歸
りたまへ」といへり。お竹等は、父の姿の見えずなるまで見送り、
父も、またふりかへりふりかへり、名殘惜しげに立ちさりたり。

注意

本課は第一學年用書第十二「家庭の樂」と聯關して教授し、兒童をして父母を思ふ心を深からしむべし。

主要なる設問

一。お竹はどんな兒でありましたか。
二。おとうさんが出立するとき、お竹にどういってきかせましたか。
三。お竹はおとうさんと別れるとき、どうおもひましたちうか。

第二　おかあさん

（二時間）

目的

母の恩を知らしむるを以て、本課の目的とす。

説話要領

お竹は父を見送りて家に歸れる後も、父のことを思ひいだし、その日の夕方になりて、殊にものさびしく覺えしかば、「今頃父上は如何なる所にゐたまふならんか」と、母に尋ねなどし、いつもの如く幼き弟をもりして、夕飯の用意を助けたり。かくて食

事をすまし、その夜は、父のことを話しあひて、眠につきしが、いかにしけん、夜中頃より、幼き弟は泣きいだしたれば、母は起き直りて抱きあげ、いろいろにすかし慰むれども、なほ泣きやまず。お竹はこれをみて、「私の幼きときにも、かく泣きしことありしか」と尋ぬるに、母は「汝もこの兒の如く、幼きときには一夜中泣き通しに泣きて、それがために眠らで夜を明したることもありき」といへば、お竹は深く母の恩の深きに感じたりき。

諸子よ。諸子もまた慈愛心深き母の手に育てられしならずや。母なき子にも母に代りて育てくれし人あらん。これ等の人の世話を受けしことといかばかりぞ。諸子を育てあげたる母の心配と苦勞とは一通りのことにあらず。時時はこの兒の如く夜中に泣きて母の眠を妨げ、殊に病氣のときは晝夜ともに母の親切なる介抱をうけしなり。されば、つねにその恩を忘るべからず。

注意

本課は第一學年用書第九「おとうさんとおかあさん」と聯關して教授し、また同課の注意を參考すべし。

主要なる設問

一。お竹の弟が夜中に泣きだしたとき、おかあさんはどういたしましたか。
二。そのとき、お竹はどういひましたか。
三。おかあさんはお竹になんといってきかせましたか。
四。皆さんはおかあさんにどんな御恩をうけましたか。

第三　おとうさん

（三時間）

目的

父の恩を知らしむるを以て、本課の目的とす。

說話要領

お竹は母と共に父のことをあんじ、指折りかぞへて歸の日を待てり。ある日の朝、母を助けて部屋の掃除をなさんとて、戸を開くに、近所にすむ一人の少女路を通りかかれり。破れたるきたなき衣服を着て、見るもあはれなる姿なり。お竹はおもはず「あー、あの兒はかはいさうなり」といへば、母は「あの兒も父の存生の間はかくまで見ぐるしき衣服を着たることなく、學校にも行きしかど、父失せたる後、母一人の力にては、十分の世話もできず、かくあはれなるさまとなり、學校に行くこともできぬよーになりたり」といふ。さて母はなほ詞をつぎて、「父の恩の深きはかの兒のさまを見ても知らるべし。汝の父のつねづね働きたまふも、汝等を安らかに成長せしめんがためなり」といひきかせしかば、お竹はいよいよ父の恩の深きをさとれり。間もなく父は歸りきたりて、家内の人人はその無事に歸りしを喜び、父もまた一家の内何事もなかりしを喜びたりき。

諸子よ。諸子もまたお竹の如く、父母の御蔭によりて安らかに成長し行くなり。諸子が日日學校にきたりて課業を受くるも父母の御蔭にあらずや。諸子の本も着物もまた父母の賜物にあらずや。諸子よ。父母の恩の深く高きことをおもへ。

格言　父母ノ恩ハ山ヨリモ高ク、海ヨリモ深シ。

注意

本課を敎授したる後、以上の三課をまとめて復習せしめ、なほ第一學年用書第十「孝行」と聯關して、父母、祖父母等に對する務をも敎ふべし。

主要なる設問

一。お竹はあはれな兒を見て、何と思ひましたか。
二。その兒はなぜそんなふーをしてゐましたか。
三。皆さんはおとうさんに、どんな御恩をうけてゐますか。
四。孝行とはどんなことですか。

第四　自分のこと

（三時間）

目的

自分のことは自分にてなすべきことを知らしむるを以て、本課の目的とす。

說話要領

ある農家に二人のきょーだいあり、姉をお梅といひ、弟を一郎といひ、二人とも學校に通へり。お梅はその年九歲、性質溫和にして、よく父母につかへ、一郎は七歲にて、元氣よき兒童なりき。お梅は一郎を愛すること深く、つねづね親切に世話せり。

ある日、お梅は例の如く朝早く起きて、毎朝なすべき仕事をなし終へ、かねて用意しおきたる學校用具を携へ、いっしょに行かんとて一郎を促したり。一郎はまだ何の用意もできをらざれば、大にあわて、姉に向ひて、「學校用具をとりそろへて、かばんに入れたまはらずや」といふ。母は傍にありて、「一郎よ。よき兒は自分のことをば自分にてなすものなり。汝も自分にて學校用具を取り集むべし」と諭せり。一郎は母の敎に從ひ、やうやく學校用具をとりそろへてかばんに入れ、姉と共に學校に行きたり。

諸子よ。自分のことを自分にてするはまことによき習はしなり。何事にもあれ、自分の手にてなし得ることには人の手を煩さぬよーに心がくべし。自分の手にてなし得ることを父母、きょ

ーだいや召使に賴むべからず。

注意

本課に因みて兒童が學校に行くとき、または歸りたるときに學校用具、帽子、鞄、履物、傘等をとり扱ふことにつきての心得を授くべし。

主要なる設問

一。おかあさんはなんといって一郎に教へましたか。

二。一郎はおかあさんのいふことをきいて、どういたしましたか。

三。親、きょーだいや召使に世話をかけんよーにするのにはどんな心得がいりますか。

第五　教師

（三時間）

目的

教師の教を守るべきことを知らしむるを以て、本課の目的とす。

說話要領

一郎は母の教にしたがひ、自ら用意をととのへて學校に急ぎゆきしが、到着せしときは他の兒童の既に教室に入りたる後なりき。教師は一郎の遲刻せるを見て「何故に後れたるか」と問へり。一郎はありのままに答へしかば、教師は「自分にて自分の物を始末するはよきことなれども、少しにても遲刻するはあしきことなり。今後は早くより用意しおきて、決して時刻に後るることなかれ」と諭したり。

一郎はこの日の課業を終へて家に歸り、母に挨拶して「今朝少し遲刻したるため、先生より叱られたり」と語れり。母はつぶさにその次第をきき、「それは叱りたまひしにはあらず、教へたまひしなり。學校に行くときなどに、時刻に後るるは甚だあしき

ことなり。父上は汝をよき人になさんがために、學校に入れたまへり。されば汝は常に先生の教を守りて、決してこれに違ふことあるべからず」と諭したり。

諸子はこの話をききて何と思ふか。教師のいかなる人なるかは前に教へたり。教師は諸子をよき人となさんとするものなり。よくその教を守りて、決してこれに背くべからず。

注意

一。本課は第一學年用書第二「教師」「第六勉強」と聯關して教授し、また、その課の注意を參考すべし。

二。本課に因みて左の諸項を諭すべし。

イ。學校へ行くとき及び學校より歸りしときには、父母に挨拶すべきこと。

ロ。やむを得ざる事故ありて登校の際に遲刻したるときには、明にそのわけを教師に話すべきこと。

主要なる設問

一。一郎はどうして後れましたか。

二。先生はなんといって一郎に教へましたか。

三。一郎はおかあさんにどんなことを話しましたか。

四。おかあさんは一郎になんといってきかせましたか。

第六　としより

（二時間）

目的

老人に親切にすべきことを知らしむるを以て、本課の目的とす。

説話要領

日曜日の朝、お梅は母のいひつけをうけて、隣村の叔母のもとに使にゆけり。一郎も姉に請ひていっしょにゆけり。その途中、隣村

の入口にて、多くの子供が群集しゐたれば、何事かとて近づき見るに、錢を落したる一人の老人が目のよく見えぬために、すぐには拾ひあつめ得ずして、あちこちさがしをるを、子供は助けんともせず、その傍にて面白さうに笑ひゐたり。お梅はこのさまを見て、氣の毒に思ひ、一郎と共に落ち散りたる錢をさがし集めて、老人にわたせり。この繪はお梅等が老人のために錢を拾ひをる所の繪なり。老人はお梅等の親切を喜び、禮を述べて立ち去りたり。

諸子よ。お梅等がかく老人に親切にせしはまことに感ずべきことならずや。諸子も常に老人を敬ひ、その不自由を見たるときには進んでこれを助くべし。老人の不自由を見て嘲り笑ひ、または無禮なる行あるべからず。

注意

本課に因みてめくら、ゐざり、その他不具癈疾のものを嘲り笑ひ、または苦めなどすべからざることを諭すべし。

主要なる設問

一。お梅と一郎とが叔母さんの所に行く途中どんなことにてあひましたか。

二。お梅と一郎とはどんなことをして、としよりを世話しましたか。

三。としよりには、どうせねばなりませんか。

第七　きょーだい

（三時間）

目的

きょーだい仲よくすべきことを知らしむるを以て、本課の目的とす。

說話要領

お梅と一郎とは老人に別れて叔母の家にいたり、母のいひつ

けを傳へしかば、叔母は喜びて果物などを與へたり。かくてこの家の子供と晝過まで遊びしが、あまり遲くならぬ前に歸らんと、お梅は一郎を促して、叔母の家を立ちいでたり。

歸る途中にて、一郎は路ばたのうつくしき草花を見て、「これをつみ歸らん」といふ。姉は「否、否、あまり遲くならば父母も心配したまふべし。早く歸るべし」とて、路を急ぎしが、一郎ふと石につまづき、下駄の鼻緒を切らししかば、姉は一郎を助け、切れたる鼻緒をすげやりたり。とかくするうち、時刻もうつりて、村はづれまできたりし頃には、日ははや暮れかかれり。

父母は二人の歸の遲きを心配し、迎に行かんとて父が門口まで出でしとき、二人は歸りきたれり。父はその遲くなりしわけを聞きて、二人の仲よくして歸りきたれるを喜びたり。

諸子はお梅と一郎とはまことに仲よききょーだいなりと思はざるか。一郎は幼ければ、姉なるお梅はいつも親切にこれを世話し、一郎もまた決して姉のいふことにそむかざりき。きょーだいかく仲よくするはまことによき習はしなり。諸子よ。きょーだいは同じ幹よりいでたる枝の如きものなり。されば兄、姉に對してはよくそのいふことに從ふべし。弟、妹に對しては常に親切に世話しやり、若し過あらば、これを戒むるよーに注意すべし。

格言　キョーダイハ兩手ノ如シ。

注意

一。本課は第一學年用書第十一「きょーだい」と聯關して教授すべし。

二。本課を教授し終りし後、第四「自分のこと」以下の課をまとめて復習せしむべ

し。

主要なる設問

一。歸り途て一郎はどういひましたか。
二。そのとき、お梅は何といってきかせましたか。
三。一郎が下駄の鼻緒を切らしたとき、お梅はどうしてやりましたか。
四。兄や姉にはどうするのがよいでせうか。
五。弟や妹にはどうするのがよいでせうか。

第八　たべもの

（二時間）

目的

食物につきての心得を知らしむるを以て、本課の目的とす。

説話要領

この繪を見よ。兒童は庭園の梅の實の大きくなりたるを見、これを食はんとて、竿にて打ち落したり。このとき、母は家の内にて、仕事をなしゐたりしが、その音をききつけていできたり。「熟せざる梅の實は腹をそこなふゆゑ食ふべからず」と戒めたり。『諸子よ。身體を大切にすべきことは前にも教へたれば覺えをらん。身體を丈夫にするには、先づ飲食をつつしむべし。熟せざる梅、桃、李、梨、柿などを食へば腹を痛むること多し。暑き頃には悪しき病なども多く流行するものなれば、殊に食物に注意し、妄に生水を飲み、または瓜、西瓜の類を食ひ過ぎぬよーにすべし。またくさり、かかりたるものを食ふべからず。身に害ある物は勿論、害なきものにてもあまり多く食ふべからず。何物にても、あまり多く食へば、身を害ふ。されば食事をなすには、毎日ほぼその分量を定め、また時刻を定めおくをよしとす。腹のすきたるとき、または已れの好む物のあるときにも、飽くまで食ふ

ことなかれ、間食もなるべくなさざるよーに心がくべし。

格言　病ハ口ヨリ入ル。

注意

本課は第一學年用書第十五「からだ」と聯關して教授すべし。

主要なる設問

一。おかあさんはこの兒になんといってきかせましたか。

二。たべてわるいものはどんなものですか。

三。たべものには、どんな心得がいりますか。

第九　清潔

（三時間）

目的

清潔の習慣を造るべきことを知らしむるを以て、本課の目的とす。

說話要領

學校にて書き方の課業ありしとき、教師は一人づつ生徒の草紙を見あるきたり。最後の列にゐたる一人の生徒は、顏より頸へかけて垢つきゐたれば、教師はこの兒童に向ひ、「なにゆゑにかく不潔になしをるぞ」と尋ねたり。この兒童は「たれも洗ひくれぬゆゑ、かく垢つきたるなり」と答ふ。教師は更に「汝は既に七歲にもなりたり。自分の身體を奇麗にすることは自分にてなさざるべからず」と戒めつつ、その手をあらため見しに、兩手はまっくろに墨にてよごれゐたり。教師はこれを見て、「かく不心得なればこそ、顏や頸にも垢をためおくなれ。見よ、この級の中に、汝の如く手のよごれたるものあるか。今すぐに行きて手と顏とを洗ひきたれ」と命じたれば、この兒童はその言に從ひて、洗ひきたれり。教師は「今より後、つねづね氣をつけて清潔の習慣

を造るべし。不潔になしおくときは、人にも嫌はれ、病氣のもととなることもあるべし」と懇に諭しきかせたり。

諸子もまた身體を清潔になさざるべからず。不潔なるときは人にも嫌はれ、病氣のもととともなること、この教師の教へし如くなれば、常に清潔の習慣を造るよーにすべし。

注意

一。本課を教授する際、身體を清潔にするのみならず、衣服、書物、その他の物品をも汚さぬよーにし、また不潔なる場所にて遊びなどせざるよー諭すべし。

二。左の諸項を諭すべし。

イ。頭髪を不潔になしおかぬこと。

ロ。齒を清潔になすべきこと。

ハ。手足の爪に垢をためおかぬこと。

ニ。入浴の際には、よく身體を洗ふべきこと。

主要なる設問

一。後の列にゐた一人の生徒の顏や頸はどんなになってゐましたか。

二。先生はそれを見て、なんといってきかせましたか。

三。先生はその生徒の手がまっくろになってをるのを見て、なんといひましたか。

四。からだをきたなくしておくのはなぜわるいのですか。

第十　正直

（三時間）

目的

正直の大切なることを知らしむるを以て、本課の目的とす。

説話要領

ある農夫、その子を商人になさんとて、ある町の吳服店に預け丁稚となして商業を見習はせおきたり。ある日、この店に一人の婦人きたりて、反物を買はんとせしが、この兒童はその婦人の買はんとする反物にきずあるを見つけ、これを婦人に告げ

しかば、婦人はその反物を買ふことをやめてたち去りたり。

店の主人はこれを見て、「賣り物のきずを客に示すは不都合なり」といひて、この兒童を咎め、直に手紙をその父に送りて、「速に汝の子を連れ歸るべし」といひやりたり。父は手紙を見て、大に驚き、わが子はいかなる過を犯したるかと心配しながら、この店にきたりて、その故を問ひしに、主人はそのわけを話して、「この兒童は到底商人となるべき見込なし」といへり。

父はこれをききて、わが子の過がこのことのみならんには、益愛すべきものなりと思ひて、直に連れ歸りしが、この兒童はこれより後も常に正直なりしかば、遂に大なる商人となりたり。

これに反して、かの呉服店は次第に信用を失ひ、その家遂に衰へたりき。

諸子はこの兒童の話をききて、何と思ふぞ。正直は時ありて己れに不利なるよーに見ゆることあれども、これ一時のことにして、決して永久の不利にはあらず。もし正直の心がけ足らざれば、何事をなしても、人の信用を得ること難かるべし、されば、諸子も常に正直の心を失ふことなかれ。

格言　正直ハ一生ノ寶。

注意

本課に因みて左の諸項を諭すべし。

イ。人に親切をつくすべきこと。

ロ。一時の利害のために正直の心を失ふべからざること。

主要なる設問

一。お客が反物を買はうとしたときに、この丁稚はどんなことを見つけましたか。

二。それでこの丁稚がどうしましたか。
三。おとうさんはなんと思って、この丁稚をつれてかへりましたか。
四。皆さんはこの子供のしたことをどう思ひますか。
五。この子供はしまひにどんなになりましたか。

第十一　きまりよくせよ

（三時間）

目的

きまりよくすることの大切なるを知らしむるを以て、本課の目的とす。

説話要領

お鶴とお絹とは仲よき友だちなり。ある休の日に二人はお絹の家にて手毬をつきて遊びゐしが、十二時に近くなりてお鶴は辭して歸らんとするを、お絹はとどめて「今しばらく遊びてはいかに」といふ。お鶴は「否、最早わが家の食事時なれば、歸らねばならず。食事をすましたる後、父母の許を得ば、再びきたるべし」とて歸りゆけり。かくて晝食をすまし、再びお絹の家にいたれり。

諸子よ。何事につきても、お鶴の如くきまりよくするは大切なることなり。いかにおもしろき遊のあればとて、食事の時刻、起臥の時刻等を違ふべからず。時刻のみならず、何事につきてもきまりよくせざるべからず。諸子も常にきまりよくし、學ぶべきときには一心に學び、遊ぶべきときには十分に遊ぶべし。己れのなすべきことはよくこれをなし、しかる後に遊べば、まことに樂しきものなり。諸子もまたお鶴の如く、きまりよくするよー心がくべし。

格言　ヨク學ビヨク遊べ。

注意

一。本課を教授する際、第一學年用書第四「整頓」より同第七「教室と運動場」に至る各課を參考すべし。

二。時刻、整頓等に關して、日常兒童の心得べき要項を列擧して訓戒し、特に衣服學校用具、玩具等の取扱方につきて、規律を守る習慣を造らしむるよう注意すべし。

主要なる設問

一。お鶴の歸らうとしたとき、お絹はなんといひましたか。

二。そのときお鶴はなんと答へましたか。

三。お鶴は晝の食事をすましたあとでどういたしましたか。

四。きまりよくせよとはどんなことですか。

第十二　ことばづかひ　（三時間）

目的

ことばづかひをつつしむべきことを知らしむるを以て、本課の目的とす。

說話要領

ある日、課業終りて、新一等は連れだちて學校より歸りきたれり。その途中にて、一人の兒童は「馬鹿」といひて他の兒童を罵りたり。この兒童はかねてより無禮なることばをつかふ癖ありしゆゑ、新一はこの兒童に向ひて「先生はことばづかひをつつしめよと敎へたまへり。この後はかかることをやめよ。然らずばいっしょに遊ばざるべし」といひたり。

兒童はときとしてこの兒童の如く、あしきことばづかひをなすことあれども、これは甚だよからぬことなり。よし、友だち、または、大人などがあしきことばづかひをなすことありとも、これに倣ふべからず。あしきことばづかひをなす人も、初は戲に

なししこと多かりしかども、後にはその癖つきて、禮儀を知らざる人となるに至りしなり。されば常にことばづかひをつつしまざるべからず。

注意

一。本課を教授する際、兒童にありがちなるいやしき言語、擧動を列擧して丁寧に訓戒すべし。

二。本課に因みて物を授受するときの作法を教へ、また、これを實習せしむべし。

三。本課に因みて左の諸項を諭すべし。

イ。人にあだ名をつけぬこと。

ロ。人の服裝等を嘲り笑はぬこと。

ハ。野鄙なる言語、擧動をまねぬこと。

主要なる設問

一。新一は一人の子供に向って、なんといひましたか。

二。どんなことばをつかってはなりませんか。

三。なぜわるいことばづかひをまねしてはなりませんか。

第十三　約束

（二時間）

目的

約束をたがふることのあしきを知らしむるを以て、本課の目的とす。

說話要領

小太郎と文吉とは仲よき友だちにて睦しく往來しゐたり。文吉はある日、小太郎の家に遊に行きしに、小太郎はおもしろき繪本を見せたり。文吉はこれを見て、まことにおもしろく思ひ、「明日必ず持ちきたりて返すべければ、しばし貸し與へよ」とたのむに、小太郎は快く貸し與へたり。

文吉は家に歸り、母と共にその繪本を見て樂みたり。翌日は朝

早くより雨降りいでしが、文吉は學校より歸りて後、すぐにその本を持ちて、小太郎の家にかへしに行かんとせり。母はこれをとどめて「雨降りて路も悪しければ、明日にのばしてはいかが」といふ。文吉は「今日返すよーに約束しおきたり」といふに、母は「さらばかへしに行くべし。約束を守るはまことによきことなり」といひて褒めたり。かくて文吉は雨を凌ぎ、あしき路をも厭はず、小太郎の家にいたりて繪本を返したり。

諸子よ。約束せしことは必ず守らざるべからず。約束をたがふれば、さきの人を欺きて、信用を失ふに至るのみならず、大なる迷惑をかくる場合もあるべし。また、約束はかろがろしくなすことなく、よく考へたる後、父母または教師の許を受けてなすべし。

主要なる設問

一。文吉はどんな約束で繪本を借りてきましたか。

二。おかあさんが明日にのばせといったときに、文吉はなんといひましたか。

三。約束をちがへるのはなぜわるいでせうか。

四。人と約束するには、どんな心得が大事でせうか。

第十四　人のあやまち

（二時間）

目的

人の過をゆるすべきことを知らしむるを以て、本課の目的とす。

説話要領

二三日たちて、小太郎は文吉の家に遊に行き、「いつもの如く、向ふの野原にて毬投げをせずや」とすすむ。文吉は「今、母よりいひつけられたることあれば、それをすましてすぐに行くべし。さ

きに行きて待ちたまへ」とて、己が毬をわたしたり。

小太郎は野原にゆきて文吉を待つ間、ひとり毬を投げて遊びゐしが、過ちてその毬を川の中に落したり。驚きて川端にかけ行きたれども、ながれ急なれば、はやその行方をしらず、いかがせんと思案せる所に、文吉はいできたれり。小太郎は事のわけをよく話して、その過を謝せしかば、文吉は「そは甚だこまりたることなれども、過なればせん方なし」とて、他のおもしろき遊をなしたりき。

諸子よ。過は全く不注意より起ることなれば、互に氣をつけてこれを避くべし。されど過は誰にもありがちのものなれば、人の過は深くこれを咎むることなかれ。諸子のきょーだいや友だちなど、過ちて諸子の物を汚し、または、こはしなどすることありとも、諸子はこれがために怒るべからず。

注意

一。本課は第一學年用書第二十、過をかくすな」と聯關して教授すべし。

二。本課に因みて、人に對して過をなしたるときは、速に謝すべきことを知らしむべし。

三。兒童のけんかは過を咎むるより起ること少からざれば、本課に因みてこれを戒めおくべし。

主要なる設問

一。小太郎は文吉の毬を失ってどうしましたか。

二。そのとき文吉は小太郎になんといひましたか。

三。人が過をしたときには、皆さんはどうしますか。

第十五　わるいすすめ

（二時間）

目的

あしきすすめに從ふべからざることを知らしむるを以て、本

課の目的とす。

說話要領

文吉、小太郎の二人、かの野原にて遊べるとき、他の兒童三四人連れだちてこの所にきたれり。いづれも同じ學校の生徒なれば「向ふの堤の下にていっしょに遊ばん」といひ、文吉も小太郎も連れだちて行きたり。

このとき、一人の兒童のいふよー「あの小屋の中に隱れゐて、堤の上を通るものあらば、不意に聲をあげておどさば面白からん」といふ。文吉は「それは甚だあしき遊なればやむべし」といひ、小太郎も「先生はつねにかかる惡戲を堅くとどめたまひしなり」とて、承知せざれども、他の兒童はきき入れず、なほこの惡戲をなさんとす。文吉と小太郎とはやむことを得ず別れて立ち歸りたり。

文吉は家に歸りて、このことを母に話すに、母は褒めて「友だちの惡しきすすめに從はざりしこと、まことによし。この後も、たとひ親しき友だちのすすめなりとも、あしきことには決して從ふべからず」と敎へたり。

注意

本課は第一學年用書第八「あそび」と聯關して敎授し、また兒童のなし易き惡戲等につきて特に訓戒を加ふべし。

主要なる設問

一。友だちが人をおどして遊ばうといったときに、文吉はどういひましたか。

二。そのとき、小太郎はどういひましたか。

三。文吉のおかあさんはなんといって敎へましたか。

四。友だちからいたづらをすすめられたとき、どうするのがよいでせうか。

第十六　友だち

（二時間）

目的

友だちは助けあふべきことを知らしむるを以て、本課の目的とす。

說話要領

小太郎、文吉についてはなほ話あり。ある日、小太郎は遊に行く途にて文吉が風呂敷包を持ちて、路端の木の下に休めるを見たり、小太郎は直に文吉のそばに行き、「なにをなせるぞ」と尋ぬるに、文吉は「今、伯父の家にこの風呂敷包を持ち行く所なり。疲れたればここにて休みをるなり」と答へたり。

小太郎はこれをききて、「さらば二人にてかはるがはるその風呂敷包を持ち行かん」と親切にいふ。文吉は喜びてその意に從ひ、かはるがはるその風呂敷包を持ちゆきて、伯父の家に屆けたれば、伯父は喜びて二人の仲よきことを褒めたり。

諸子よ。小太郎と文吉とはまことに仲よき友だちならずや。小太郎に助けもらひし文吉はさぞ嬉しく思ひしならん。文吉を助けやりし小太郎もまた心樂しく思ひしならん。友だちの間は、常にかく仲よくして助けあふべし。もし友だちがよきことをなさんとするときは、これを助け、惡しきことをなさんとするときは、これを戒むべし。

注意

本課は第一學年用書第十三「友だち」と聯關して敎授すべし。

主要なる設問

一。小太郎は文吉の包をどうしてやりましたか。

二。文吉は小太郎に助けてもらつて、どう思ひましたらうか。
三。小太郎は文吉を助けてやつてどう思ひましたらうか。
四。友だちどーしはどんなにするのがよいでせうか。

第十七　物を粗末にあつかふな　（三時間）

目的

物を粗末にあつかふべからざることを知らしむるを以て、本課の目的とす。

説話要領

勇吉は學校よりの歸りみちにて、多くの子供が兵隊のまねをなせるを見、その仲間に入らんとて、家にかへるや否、かばんと辨當箱とを投げいだしおき、母につげて驅けいだしたり。かくてよく遊びて後、家に歸りて見れば、辨當箱は二つにわれゐたり。勇吉はさきに投げいだしたるためにこはれたることを知りて、いかがはせんと思ふ氣色を見て、姉は物靜に「それは物を粗末にあつかひしによれり。日頃丁寧にあつかひしときには、かかることなかりしならずや。されば何物にても大切にあつかふべし」と敎へたり。

諸子よ。何物にても粗末にあつかへば損ずること早し、たとへば諸子のたづさふる書物の如きも、丁寧にあつかへば、いつまでも使はるべけれども、粗末にすれば、じきによごれ破れて、役にたたぬよーになるべし。されば何物にても丁寧にあつかふべし。

注意

本課を敎授する際、左の諸項を諭すべし。

イ。人の物は特に大切に取扱ふべきこと。
ロ。書物を開くに爪にてつまみ、または指に唾してつままぬこと。
ハ。書物の表紙などが破れ、または綴糸が切れたるときは、つくろひて貰ふべきこと。
ニ。書物などに落書をせぬこと。
ホ。筆、硯、墨、紙等の取扱を丁寧にすべきこと。
ヘ。草紙または帳面の紙をやぶらぬこと。
ト。帽子、下駄、傘等を丁寧に取扱ふべきこと。

主要なる設問

一。勇吉は學校から歸ってきて、かばんや辨當箱をどうしましたか。
二。勇吉の辨當箱はどんなになってゐましたか。
三。勇吉の姉さんはなんといってきかせましたか。
四。物を取扱ふにはどんな心得が大切ですか。

第十八　あやまち

（二時間）

目的

過をせぬよーに注意すべきことを知らしむるを以て、本課の目的とす。

説話要領

正雄の家に來客ありしとき、父は正雄を呼びて「炭取を持ちきたれ」といひつけたり。正雄は臺所に驅け行きしはずみに、茶の間なる火鉢につまづき、その上にかけたる土瓶を覆せり。驚きて聲をあげたれば、母は何事ならんかと怪みて驅けきたれり。正雄はそのわけを話してわびしかば、母は「それは汝の不注意より起りしなり。やけどをなさざりしこそ幸なれ。もしやけどにてもなさばいかがすべき。これより後はよく心を用ひて、再びかかる過をなさざるよー心がけよ」と敎へたり。

諸子もまた正雄の如く不注意より過をなすことあらん。されば常に氣をつけて、過をなさぬよー心がくべし。また過をなしたるときには、正雄の如く直にそのわけを話して謝すべし。

注意

一。本課は第一學年用書第二十「過をかくすな」と聯關して教授し、また兒童のなし易き過を擧げてこれを戒むべし。

二。本課に因みて、物事にあわてぬよー氣をつくべきことを諭すべし。

主要なる設問

一。正雄は炭取をとりにいって、どんな過をしましたか。

二。正雄のおかあさんはそのときなんといってきかせましたか。

三。過をせんよーにするにはどんな心がけが大事ですか。

四。過をしたときには、どうせねばなりませんか。

第十九　拾ひ物

（二時間）

目的

拾ひ物に對する心得を知らしむるを以て、本課の目的とす。

說話要領

正雄は母につれられて、妹とともに野遊に行き、その歸り途にて、二十錢の銀貨を拾ひたり。正雄は大に喜びて、「これにて凧を買はん」といふ。母は「否、否、この錢は汝の物ならねば、勝手につかふべからず。試に思へ。もし汝が父の賜ひし繪本をおとし、汝の友それを拾ひて返さざらんには、汝はいかに思ふべきぞ。この銀貨もこれをおとしたる人に返さざるべからず」と教へたり。」かくて歩み行きしに、向ふより一人の子供が何物をかさがしながらきたるにあへり。正雄は進みよりて、「何をたづぬるぞ」と問ふに、その子供は「今この邊にて銀貨をおとしたれば、さがす

なり」と答ふ。正雄は直にかの銀貨を取りだして「あなたのさがしをるはこれなるべし。今かの所にて拾ひたり」とてわたししかば、子供は大に喜び、厚く禮をのべて受け取りたり。

正雄は家に歸りし後、家内の人たちに、拾ひ物を返ししことを話ししかば、祖父も父も正雄を褒めたり。

諸子よ。物を拾ひたるときは、如何なる物にても、勝手にすべからず。おとしたる人の知れたるときには、これをその人に返すべく、おとしたる人の知れざるときは、直に教師または父母に差し出すべし。

注意

一。本課を教授する際、拾ひ物についての心得のみならず、借りたる物はなるべく速に返すべきことをも知らしむべし。

二。學校内にて物を拾ひしとき及び物をおとししときの心得を示し、また物をおとさぬよう注意すべきことを諭すべし。

主要なる設問

一。正雄は銀貨を拾ってなんといひましたか。

二。そのとき、おかあさんはなんといって教へましたか。

三。物を拾ったときは、どうしたらよいでせうか。

四。人から物を借りたときは、どんな心がけがいりますか。

第二十　生き物

（三時間）

目的

生きものを苦むべからざることを知らしむるを以て、本課の目的とす。

說話要領

正雄は學校より歸りて、父母に挨拶し、己が部屋に入りしに、隣

の部屋にて騒がしき物音したり。何事かと襖を開きみれば、妹のお鈴は風呂敷にてかひ猫の頭を包み、これを追ひ廻して、その苦み鳴きつつ彼方此方を飛び廻るを見て、手をうちて喜びゐたるなり。

正雄これを見てお鈴に向ひ「なに故にかかるわるいたづらをなすぞ。目を掩はれたる猫はいかばかり苦しからん。汝若し風呂敷にて目を掩はれて追ひ廻されなば、その苦しさに堪へずして、泣き悲むなるべし、戯にもかかるあしき遊をなして生きものを苦むることなかれ」といふ。お鈴は兄のことばをききて直に風呂敷をとり「やりしかば、猫は喜びて庭の面に躍りいでたり。

諸子もまた生き物を苦むることなかれ。必要あるときにこれを殺すはあしきことにあらざれども、蟲けらの類も皆生あるものなれば、これを苦めて樂とするはあしきことなり。とんぼや蟬の羽を切り、鳥の巣や蜂の巣をあらし、蛙や金魚を玩びて苦むるが如きは皆あしきことなり。

注意

一。本課を教授する際、特に意を用ひて、牛、馬、鶏、犬、その他、人家に飼養せる動物を妄に苦めざるよー心がくべきことを諭すべし。

二。必要もなきに草木を折りとり、その皮を剝ぎ、花や芽をつまみ取りなどせぬよー諭すべし。

三。本課を教授し終りし後、第十八「あやまち」以下の課をまとめて復習せしむべし。

主要なる設問

一。正雄が學校から歸ってきたとき、お鈴はどんなことをして遊んでゐましたか。

二。正雄はなんといってお鈴に教へましたか。
三。弟や妹がとんぼや蟬をいじめるのを見たらどうしようと思ひますか。
四。家にかってある生き物をどうしてはなりませんか。

第二十一　日の丸の旗

（三時間）

目的

日の丸の旗は日本國のしるしなることを知らしむるを以て、本課の目的とす。

說話要領

今日は紀元節の祝日なれば、家家の軒に日の丸の旗を立てたり。これ等の子供は朝日に輝く旗を見て喜びあへり。

いづれの國にも皆その國のしるしの旗あり、日の丸の旗は日本國のしるしなり。されば天長節、紀元節等の祝祭日には、學校にても、家家にても、皆この日の丸の旗を立つ。また外國に居住する日本人もこれ等の祝祭日にはこの日の丸の旗を立て、わが國の船が外國に行きて、その國の港に碇泊するときにも、皆この日の丸の旗を掲ぐ。諸子はこの日の丸の旗のひらめくを見て、勇ましくは思はざるか。

注意

一。日の丸の旗はわが國のしるしなれば大切なるものなることを理解せしむるよう注意すべし。
二。備考に掲げたる日の丸の旗の歌はその意義を理解せしめたる後便宜これを暗誦せしむべし。

主要なる設問

一。日の丸の旗は何のしるしですか。
二。日の丸の旗はどんなとき立てるものですか。

三、日の丸の旗の立つてをるのを見てどんな心もちがしますか。

四、皆さんは日の丸の旗の話をきいてどう思ひますか。

備考

日の丸の旗

一、萬の國のしるしの旗に　すぐれて見ゆるわが日の御旗
祝の日にも祭の日にも　御國の光と仰ぎてたつる
あーめでたしや日の丸の旗

二、隔たる國の港の船に　めだちて見ゆるわが日の御旗
いづくにゆくもわが國人は　御國の榮を祝ひてたつる
あーなつかしや日の丸の旗

三、學のにはに業なしとげて　東に西に世界のうちに
わが日の御旗輝くごとく　御國の譽をはげみてあげん
あーいさましや日の丸の旗

第二十二　規則

（三時間）

目的

規則にしたがふことの大切なるを知らしむるを以て、本課の目的とす。

說話要領

ある日、二人の生徒は學校の歸り途にて小川のほとりを通れり。この川はながれ甚だ急にして、兩岸の小高き堤には「この堤にのぼるべからず」と書きたる立札あり。然るに一人の生徒はその堤に驅け上りしに、他の一人は立札を指し「かく登るべからずと規則にて定めてあれば、我等はこれを守らざるべからず」といひてとどめたり。されど堤に登りし生徒は四方を見廻し、外に人のをらざるを見て、友だちの忠告をききいれず、その

ままに堤の上を進み行きしに、暫くありて横路より一人の巡査いできたり、堤の上を歩める生徒を見て、その不心得を咎めたり。

諸子は人のをらぬときにても、決して規則に背くべからず。規則にしたがふことをつらく思ひ、またはこれを不便と感ずることありとも、必ずこれを守りて、決して犯すべからず。「入るべからず」と記されたる場所には決して入ることなかれ。「折るべからず」と記されたる木は決して折ることなかれ。然らずばよき人と生ひたつこと能はざるべし。

注意

本課を教授する際、特に注意して、兒童が平生心得べき學校内の規則、道路通行上の規則等を示し、また妄に鐵道線路内を通行すべからざることを諭すべし。

主要なる設問

一。一人の生徒が土手にのぼらうとしたとき、その友だちはなんといひましたか。

二。土手にのぼった生徒はなぜ四方を見廻したのでせうか。

三。土手の上をあるいた生徒はどんなめにあひましたか。

四。皆さんが守らねばならん規則はどんなことでありますか。

第二十三　天皇陛下

（二時間）

目的

天皇陛下の御事を知らしむるを以て、本課の目的とす。

説話要領

諸子よ。天皇陛下のいかなる御方におはしますかは既に敎へたれば、よく覺えをらん。今また天皇陛下の御事につきて、話し

きかすべし。

天皇陛下は宮城におはしまして政務を御覽あそばさるるにも、早朝より終日御勵精あらせらるると承る。

天皇陛下は各地方を御巡幸あらせられて、民情を御視察あらせらる。

天皇陛下はまた、時時陸海軍の大演習を行ひたまひて、軍人の働を御覽あらせられ、わが國軍事の進歩をはかりたまふ。かかる際には、親しく兵卒を召して種種御下問あらせらることもありと承る。

諸子よ。天皇陛下はかくの如くに御勵精あらせられて、わが國の隆盛ならんことをはかりたまへり。われ等臣民たるものはその御盛德を仰ぎ奉らざるべからず。

注意

本課は、第一學年用書第十四「天皇陛下」と聯關して教授すべし。

主要なる設問

一。天皇陛下はどんなに政事に御勉強になりますか。

二。天皇陛下が御巡幸になるのは何のためでせうか。

三。天皇陛下は大演習のときにはどんなことをなされますか。

四。皆さんはこの御話をきいてどう思ひますか。

第二十四　勇氣

（二時間）

目的

勇氣を起さしむるを以て、本課の目的とす。

說話要領

明治二十七八年戰役のとき、朝鮮に渡りしわが國の軍隊は、成歡といふ處に集りし清國の兵をうち破らんとて、進みゆきた

り。このとき、わが軍隊の先鋒は闇夜に途を失ひたるに、敵兵不意にあらはれてわが軍を砲擊せり。時に四邊暗黑にして足もとだに見えず、僅に銃口より發する火光によりて敵兵の人家に據れることを知り得たるのみ。わが兵は二十餘名に過ぎざるうへ、不意の攻擊にあひしこととて一時躊躇して進まざりき。

このとき、陸軍二等卒木口小平は隊長松崎大尉に從ひ、よくその職を守りて令を傳へゐしが、大尉の命により敵前數歩の所にありて、少しもおそれず、勇ましく三度まで、進軍の譜を奏して、士氣を勵す際、忽ち彈丸にあたりて斃れたり。わが兵士等はこの勇ましき喇叭の響に勵されて突進し、遂に敵兵をうち破りたり。

夜明けて後、小平の屍を檢するに、かたく喇叭を握りて口にあてたるまま、姿勢を亂さずして死にゐたりしかば、見る人にして感ぜぬものはなかりき。小平の如きは實に勇ましき働をなしものといふべし。

主要なる設問

一。日本の軍が成歡といふところへ進んでいく途中で、どんなことが起りましたか。

二。そのとき、日本の軍はどうして敵をうち破りましたか。

三。木口小平はどんなふーでしんでゐましたか。

四。皆さんはこの話をきいてどう思ひますか。

第二十五　勇氣（つづき）

（三時間）

目的

前課に同じ。

說話要領

明治二十七八年戰役の際には、海上にてもはげしき戰爭ありて、清國の艦隊大に敗れしかば、威海衞の灣內ににげ隱れ、灣の入口に堅固なる防材を設けて、わが國の艦隊の進入するを防ぎたり。

わが國の艦隊は敵を追ひて灣外に集りたれども、その內に進み入ること難かりき。ある日、わが艦隊の司令長官は水雷艇長を集めて、「諸君は今夜水雷艇を以て灣內に突入し、水雷を放ちて敵艦を轟沈せしむべし。これは各國海軍の未だ試みざることなれば、まことにむつかしき事にて、もとより生きては歸りがたかるべし。されど諸君は國家のために己が身を捨てて必ずこれをなし遂げよ」と命じたり。水雷艇長みな少しも恐れず、いづれも謹みて命を受けたり。

この夜十艘の水雷艇は闇に乘じ、きびしき寒さをしのぎ、防材を超えて灣內に進入せしに、敵艦はこれをさとり、砲彈を發すること雨の如し。一艘の水雷艇はこれにあたりて破裂せしが、その他のものはいよいよ勇氣を振ひて敵艦に近づき、遂に水雷を放ちて敵の旗艦定遠を轟沈せしめたり。次の夜も數艘の水雷艇前夜の如く灣內に忍び入りて、更にまた敵艦三艘を轟沈せしめたり。

この水雷艇の突擊によりて敵の兵力大に衰へ、やがて殘れる艦隊も悉く降服するに至れり。

主要なる設問

一清國の艦隊はどんなにして、わが國の艦隊を防ぎましたか。

二。艦隊の司令長官は水雷艇長を集めて、どんなことをいひつけましたか。
三。水雷艇はどんなはたらきをいたしましたか。
四。清國の艦隊はしまひにどうなりましたか。

第二十六　人に迷惑をかけるな　（二時間）

目的

人に迷惑をかくべからざることを知らしむるを以て、本課の目的とす。

說話要領

この繪を見よ、これはお千代といふ女の兒が庭の掃除をなし終へて、今そのごみを棄てんとする所なり。この兒は親に孝行にて、よく母の手つだひをなせり。この朝も母のいひつけにて、庭掃除をなし、ごみをはきよせしが、これを表に持ち行きて路ばたに棄てんとせり。父これをとどめて、「かかるきたなきごみをば路ばたに棄つべからず。これを棄てなば路はきたなくなり、通行する人も迷惑すべし。これはかならずごみための中に入れ置くべし」と諭したり。

諸子はらんぷのかけを拾ひ取りし祖母の話を記憶するか。お千代の父がお千代を戒めしも、世間の人に迷惑をかけぬためなり。我等は多くの人とともに、この世の中にくらしをるものなれば、相互に迷惑をかけぬよーに心がけざるべからず。道路にて往來の妨となるが如き遊をなし、塀や垣などに惡戲をなし、または公園、社寺、學校等の樹木を折り取るなどはいづれも世間の人の迷惑となることなれば決してなすべからず。

注意

第一學年用書第二十五「人に迷惑をかけるな」に聯關して教授すべし。

主要なる設問

一。お千代は掃きよせたごみをどうしようとしましたか。

二。お千代のおとうさんはなんといってそれをとめましたか。

三。路ばたにごみを棄てるのはなぜわるいのですか。

四。世間の人に向っては、どんな心得が大事でせうか。

第二十七　よい子供

（四時間）

目的

二人の子供が父母より繪本を貰ひし話によりて、これまで教へしことをまとめて復習せしむるを以て、本課の目的とす。

說話要領

二人の子供は今父母より繪本を貰へり。これはきょーだいにて二人ともよき子供なり。家にありては、よく父母につかへ、學校にては、よく教師の教を守り、お梅と一郎との話をききては、これにならひてきょーだい仲よくし、小太郎と文吉との話をききては、これにならひて友だちと仲よく交り、ことばづかひをつつしみ、きまりよくし、自分のことは自分にてなし、身體を清潔にし、物を大切に取り扱ひ、規則にしたがひ、人に迷惑をかけず、つねに正直にして勇氣に富みしかば、父母も教師も大に喜びゐたり。されば今父母は二人を呼びよせて平生の心がけを褒め、繪本を與へたるなり。

諸子もまた今まで先生より教へられたる心得を忘れず、常によくこれを守り、よき日本人となりて、天皇陛下の御恩に報い奉るよー心がくべし。

注意

本課は本學年にてこれまで教へきたれる各課をまとめて復習せしむるものなれば、教授の際には特にこの點に注意し、適宜敷衍して、十分に理解せしむるよーに務むべし。

主要なる設問

一。このきょーだいはお梅と一郎との話をきいてどういたしましたか。

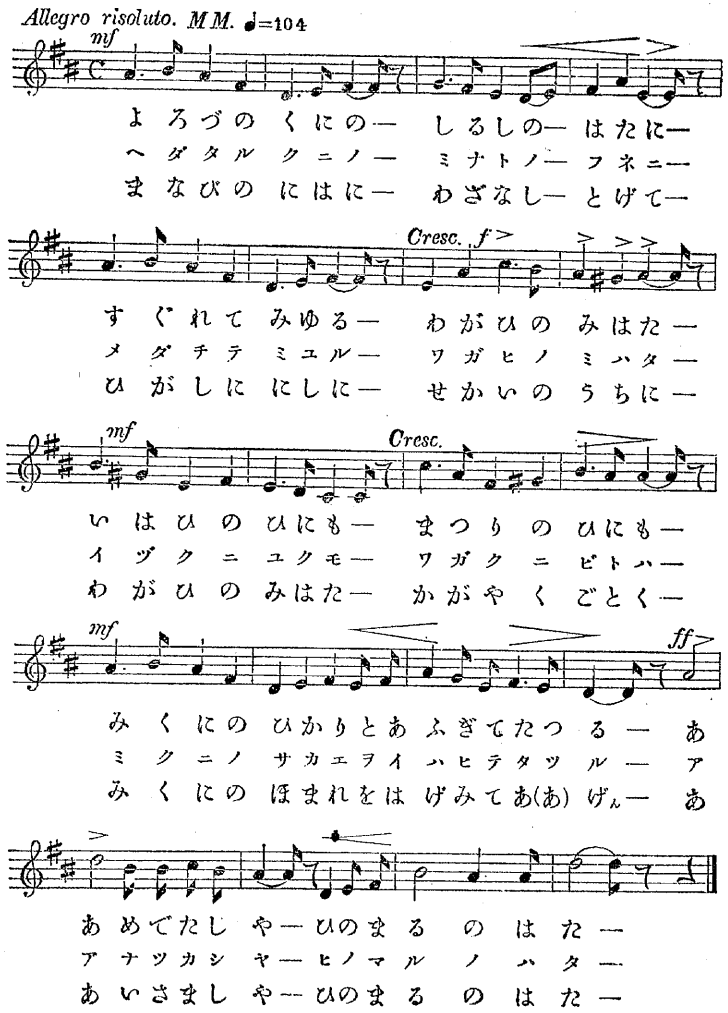
二。このきょーだいは小太郎と文吉との話をきいてどういたしましたか。

三。皆さんはこのきょーだいの話をきいてどうしようと思ひますか。

四。このきょーだいのよーなよい子供になるにはどんな心得が大切でせうか。

附　　録

日の丸の旗



小2-289

明治三十六年八月三十一日文部省發行

著作權所有

著作者　文部省

尋常小學修身書第二學年教師用

定價金七錢

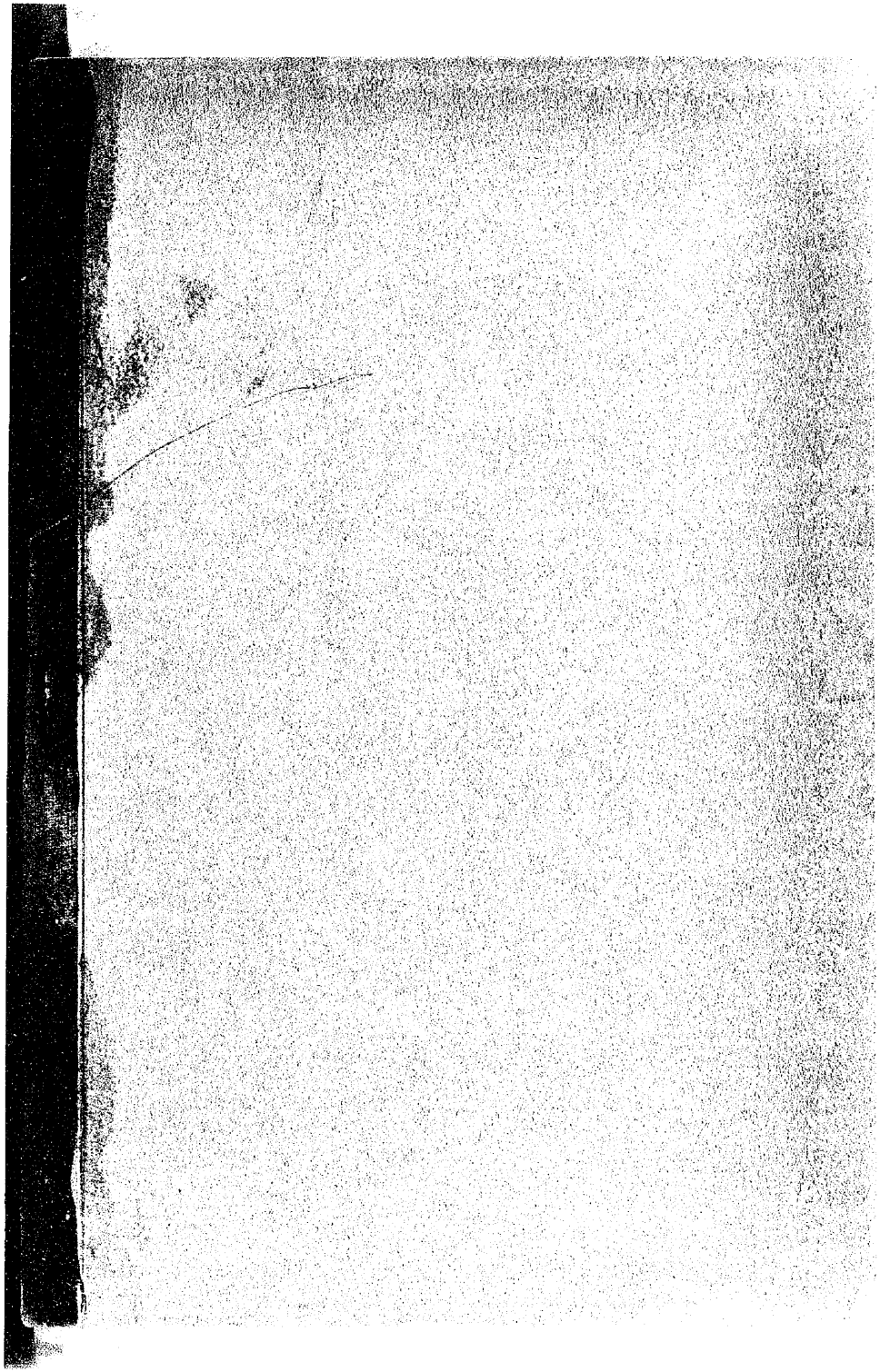
明治三十六年十二月廿二日翻刻印刷
明治三十六年十二月廿一日翻刻發行
明治三十六年十二月　日文部省檢査濟

翻刻發行者　廣島市大手町二丁目五十九番邸　早速勝三

發行所　大阪市東區唐物町四丁目八十番邸　教育圖書合資會社

印刷者　東京市麹町區有樂町三丁目一番地　大西鍊三郎

印刷所　東京市京橋區弓町二十四番地　三協合資會社

販賣所

大阪市東區安土町四丁目　積善館本店
大阪市南區安堂寺町通四丁目　田中宋榮堂
大阪市東區北久寶寺町四丁目　濱本明昇堂
大阪市東區南久太郎町四丁目　武田交盛館
大阪市南區塩町通三丁目　鈴木修文館
廣島市塩屋町　積善館支店
廣島市紙屋町　友田書店